

4月1日 四旬節第5主日

イザ 43:16～21 フィリ 3:8～14 ヨハ 8:1～11

1. ヨハ

この有名な姦通の女の物語りから、私たちは神の裁きと救いという二つの事柄を教えられます。この二つの事柄の重みがいずれも十分に認識されることの大切さに注目したいと思います。なぜならイエス・キリストは“裁き主”であると同時に“救い主”である方だからです。

この姦通の女を捕えて連れて来た律法学者たちやファリサイ派の人々は、律法の規定に従ってこの女を裁くことを提案しました。イエスを取り囲んでいた民衆も、それは当然のことだと考えたに違いありません。しかしイエスは違っていました。イエスは先ず彼らの提案に同意出来ないことを、態度で示されました。イエスは黙って指で地面に何か書き始められました。彼らに十分にしつこく問い続けさせてから、最後にイエスは口を開きました。

v.7 「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」

このイエスの言葉は、姦通の女を囲んでいたすべての人たちへの強烈な裁きの言葉となりました。人々は一人また一人と立ち去り、そして女は裁かれずに残ったのでした。

主イエス・キリストがその受難と復活によって成就された救いの業は、終末の裁きからの救いです。復活によって「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(使 10:42) イエスは、同時に「来たべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエス」(1テサ 1:10) なのです。終末の日にすべての人々への裁きが確かに来るように、その裁きからのイエス・キリストによる救いも確かに終末の日に実現するので

す。

姦通の女の物語りは、この将来の裁きと救いを私たちに考えさせてくれます。姦通の女の立場も、律法学者たちやファリサイ派の人々の立場、またそこに集まっていた民衆の立場も、すべてが終末の裁きの日をやがて迎える私たちの立場に通じているからです。

2. フィリ

使徒パウロは「律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義」(v.9) について語りました。

私たちは救い主イエス・キリストを信じて洗礼の秘跡を受け、主日ごとにミサをささげる者となった会衆です。私たちは自分の努力や功績によって律法による義を獲得しようとしているのではありません。そうではなくて「信仰に基づいて神から与えられる義」を信じて、終末の日の裁きからの救いに期待しています。受難と復活の主イエス・キリストは“裁き主であると同時に救い主” なのです。このように私たちは代々の教会の聖徒たちと共に、将来の裁きの日、将来の私たちの救いの実現の日を待つ民として、この地上の旅路を歩んで行きます。

主イエス・キリストの受難と復活は、この終末の日の裁きから私たちを救うためのものでした。

3. イザ

v.19 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。」

私たちが今年も準備して、間もなく迎えようとしている復活の祭儀は、単に過去の出来事を振り返るためだけのものであってはなりません。そうではなくて、やがて私たちすべての者たちが迎える終末の裁きの日に「来たるべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエス」(Iテサ 1:10)の救いを、大いに語り大いに祝うことこそが、復活の祭儀であり復活節なのです。

「復活の主日から聖霊降臨の主日に至るまでの50日間は、一つの祝日として、またより適切には“大いなる主日”として、歓喜に満ちて祝われる。」(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 22)

アーメン。

4月8日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 ルカ 23:1~49

受難の主日のミサは、救い主キリストのエルサレム入城の記念の行列で始まります。入城の福音が朗読されて、私たちは「主の名によって来られる方」(ルカ 19:38) を賛美の歌のうちにお迎えします。

この方は「十字架の死に至る従順」(フィリ 2:8) を父にささげるために、エルサレムに来られました。私たちは今年もいよいよ、“全典礼暦年の頂点”(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 18) である主の受難と復活からなる過越の聖なる三日間を過ごすこととなります。

1. ルカ

受難の物語りはいずれの福音書の中でも大きな部分を占めていて、教会がその誕生の頃からずっとこれを特別に重要視して来たことが伺えます。

ルカ福音書の受難物語りだけが伝えているいくつかの挿話や資料があって、それらが読者の印象に残りますが、それは教会の福音理解をより深めより豊かにしてくれるものです。

私たちの主イエス・キリストの死は、御自分の罪のためのものではなかったことを、ルカ福音書は特に強調しようとしているように見えます。イエスが十字架上で言われた言葉、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(v.34) や、もう一人の犯罪人への言葉、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(v.43) は、私たちの罪の赦しのためのいけにえとなられた主イエスの死を、印象づけるための説得力を持っています。最後に百人隊長は息を引き取られたイエスを見て、「本当に、この人は正しい人だった」(v.47) と告白しています。

このようにして神の子であるイエス・キリストは、「自らその身にわたしたちの罪を担って」(1ペト 2:24) 死んでくださったのでした。

2. フィリ

私たちの主イエス・キリストの受難を“神の僕の従順”という理解の仕方では、聖書が証言しており、また教会が伝統的にしてきたことです。この考え方を非常に明瞭な言葉で伝えているのが、この vv.7-8 です。この従順は、先ず父なる神への従順であることに注目しましょう。

私たちの主イエス・キリストの従順は、彼を裁いたユダヤの最高法院や総督ピラトへの従順ではありませんでした。もちろん「十字架のつくり」と叫び続けた人々への従順でもありませんでした。そうではなくて、私たちの罪への父なる神の“懲らしめ”(イザ 53:5) への従順を、「十字架の死に至るまで」(v.8) ささげられたのでした。

神の身分でありながら、キリストは「自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。」

(v.7) 主イエスは「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:25) これがイエスの従順の意味です。

3. イザ

v.6 「打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」

イザヤ書の語る“主の僕”の従順を、主イエスは御自分の使命とされました。神の民である新しいイスラエルの贖いのために、父なる神への従順を学ばれました(ヘブ5:8)。「主なる神が助けてくださる」(v.7)ということへの徹底した僕の「信仰による従順」(ロマ1:5)を、私たちに代わって「人間の姿で現れ」(フィリ2:7)て、父なる神にささげられました。

このようにしてあらゆる名にまさる(救い主としての)名を父から与えられて(フィリ2:9)、私たちの主となってくださったイエス・キリストの受難と復活を、今年も教会は記念してこの期節を歩みます。

アーメン。

4月15日 復活の主日

使 10:34a,37~43 コロ 3:1~4 ヨハ 20:1~9

1. 使

v.40 「神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。」

私たちは今年も聖なる過越の三日間の典礼を経て、今朝の復活の主日のミサを共にささげています。“主の受難と復活からなる過越の聖なる三日間は、全典礼暦年の頂点として輝きを放っている”(典礼暦年と典礼暦に関する一般原則 18) と述べられている通り、私たちは特別に多くの聖書朗読を聞き、特別に多くの聖歌を歌い、特別に多くの祈願に“アーメン”と答えました。そして今日から始まった復活節の50日間を、「一つの祝日として、またより適切には“大いなる主日”として、歓喜に満ちて」(前掲 22) 祝い始めます。「“アレルヤ” がとくに歌われるのは、この期節である」(同) とある通り、復活の八日間と聖霊降臨の主日(復活節最終日)には、ミサの終わりの派遣の祝福にアレルヤを加えます。

使徒継承によって代々の教会が受け継いで来た主イエス・キリストの復活の使信こそは、私たちキリスト者の希望であります。教会は歴史の中で起こったこの出来事を信じる信仰の有無によって、立ちもし倒れもするのです。私たちは死者の中から復活された主イエス・キリストを信じて、その罪の赦しに与かり、またその復活にも与かる者となりました。

2. ヨハ

ヨハネ福音書における主の復活の朝の記述は、初代教会の信仰を實に見事に証言しています。イエスの弟子、それも後の使徒たちの中で最も重要人物であったペトロが……、そして主の母を自分の家に引き取った最年少の弟子ヨハネが……、この福音書では「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」(v.9) と説明されています。復活の証人である使徒たちでさえそうなのですから、主の復活の出来事は一般の信者たちにも彼らの常識や知性で理解できるものではありませんでした。

現代の私たちは、自分の理性や知性で理解できないような話は“信じることが出来ない”と考える傾向を持っています。恐らくこのような考え方は現代だけのものではなくて、旧約聖書の時代にも、主イエスの歩まれた時代にも、そして初代教会にもあったに違いありません。ヨハネ福音書はそのような世界に向かって、初代キリスト教会の信仰の心臓部にあたる復活理解を証言しました。

v.9 「二人はまだ理解していなかった。」 v.8 「見て、信じた。」

この使徒たちに起源する証言を、現代のキリスト者である私たちは今朝聞かされているのです。

3. コロ

v.1 「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。」

著名な新約学者であるオスカー・クルマンが、1950年代に“靈魂の不滅か死者の復活か”という有名な論文を発表しました。この論文の最初の一節をここに紹介したいと思います。

「今日、博学なプロテスタント、カトリックであれ、あるいはそうでない者であれ、普通一般のキリスト者に、死後の人間の運命に関する新約聖書の教えはどんなものと考えているのかを尋ねるとするなら、ほとんど例外なく“靈魂の不滅”という答えを得るであろう。しかしこの広く受け入れられている考えは、キリスト教について最大の誤った理解の一つである。」(邦訳 p.15)

新約聖書の語るキリストの福音は、徹頭徹尾“救済史”(神による救いの歴史)に基礎を置いていることを理解するところから、21世紀の教会は再出発しなければなりません。「(洗礼によって)キリストと共に復活させられた」(v.1, 2:12 参照)という表現は、決して哲学的な概念ではありません。既に達成された復活は今はまだ完成の状態ではないのです。

vv.3-4 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

私たちキリスト者の復活の完成は、まだ将来に残されています。そのことはキリストが現れる“最後の日”までは起こらないのです。

主イエス・キリストの復活は、私たちすべてのキリスト者の復活の希望の支えです。私たちは復活への希望のうちに、今年も十字架の勝利を賛美致します。死者の復活の信仰は、私たちが今年も歓喜に満ちて祝っているキリストの復活の出来事につながっています。ですからそれは、ギリシア的な靈魂の不滅を信じる信仰とは相容れないのです。 アーメン、ハレルヤ。

4月22日 復活節第2主日

使 5:12～16 黙 1:9～20 ヨハ 20:19～31

主イエス・キリストの復活は、私たち教会にとって単なる過去の出来事ではありません。なぜなら復活されたキリストは教会と共におられ、教会を通して現在も働いておられるからです。復活のキリストは代々の教会にとっていつも“現在のキリスト”でありました。そのことを私たち現代のキリスト者も、十分に理解したいと思います。

1. 黙

「あなたがたの兄弟であり、共にイエスと結ばれて、その苦難、支配、忍耐にあずかっているヨハネ」(v.9)は、迫害によって故郷の教会から追放されてパトモス島にいました。彼は小アジアの教会で指導的な役割を果たしていた人物であろうと推測されます。このヨハネがある主日の朝に、恐らく故郷の教会のミサのことを思い巡らしていたとき、幻を見て、それを小アジアの七つの教会に書き送るよう命じられたのでした。このヨハネ黙示録の幻は全体として、ミサをその背景として描かれているのですが、それは著者ヨハネが、地上の教会の主日のミサはその本質において終末の神の国の完成の先取りであると理解したからです。ミサにおいてキリストが、その終末の再臨を先取りして会衆のただ中に来てくださっているということ、幻を通して彼は理解しました。そしてこの理解、この信仰を彼の時代の教会に伝えるために、黙示録は書かれたのでした。

w.17-18 「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。」

この復活のキリストが、使徒たちと共に、また教会と共にいてくださるのです。

2. 使

誕生当時の教会の特色の一つは、「使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた」(v.12) ことです。復活のキリストは特に使徒たちを通して、聖霊の力強い働きを現されました。

ニケーア・コンスタンチノーブル信条がその中で、“使徒継承の教会を信じ”と宣言しているのは、非常に重要なことです。教会は使徒たちを土台として建てられた群であって、その使徒たちの任務と権能を代々の時代の司教団が受け継いで来ました。この司教によって、またこれに従属してその任務に共に与かる司祭たちによって、各地の教会では主日ごとのミサが司られています。

3. ヨハ

w.21-23 「イエスは重ねて言われた。“あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになっ

2001年4月(主日C年)

たように、わたしもあなたがたを遣わす。” そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。“聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。”」

ミサを司ることは司教および司祭の権能に属することであり、復活のキリストはミサにおいて司式者の姿で私たちに出会ってくださいます。キリストは司祭の福音書朗読と説教を通して私たちに語りかけ、司祭の祭壇奉仕を通して御自身の贖罪のいけにえを私たちに分け与えてくださいます。

この方は「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25) キリストです。

「このパンを食べ、この杯を飲み、わたしは主の死を告げ知らせる。」(典 97、Iコリ11:26)

アーメン、ハレルヤ。

4月29日 復活節第3主日

使 5:27~42 黙 5:11~14 ヨハ 21:1~14

1. 使

キリスト教会は使徒たちの宣教から始まったのだということを、私たちはよく理解する必要があります。

イエス・キリストは復活の後その弟子たちに現れて、御自分の死と復活によって成就された救いの福音を示されました。使徒たちが宣教することによって最初の教会が誕生し歩み始めた、その使徒たちの宣教は、

彼らが自分自身で考え出したものではありませんでした。そうではなくて、彼らに現れた復活のキリストが、その十字架と復活の出来事は人間に罪の赦しを与える神の偉大な贖いの御業であったということを理解させたのでした。復活のキリストが彼らに現れてくださったということ、その経験が彼らに福音を理解させ、彼らを大胆な福音宣教者に変えたのでした。

私たちが今朝の使徒言行録のテキストから聞かされている使徒たちの宣教の物語りは、主イエス・キリストの復活から数ヶ月という非常に早い時期の出来事の報告です。使徒たちは主の復活後の数週間で、それまで彼らが考えることも出来なかった全く新しい福音理解を持つ宣教者に変身したのでした。それは特別な聖霊の働きであり、神の啓示だったのだと言う以外ありません。

v.31 「神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。」

使徒たちが理解したイエスは、復活して父なる神の右に上げられたキリストでありました。彼らは復活のキリストとの出会いによって、イエスの生涯と死と復活の出来事が神の大いなる救いの出来事であり、神はそこで決定的な贖いの御業を実現されたということを理解しました。

このようにして誕生した教会は、ですから“イエスはキリストであるという宣教”によって生まれた宗教であって、十字架と復活の出来事を抜きにして、また使徒たちが主の復活の後に受けた啓示を抜きにして考えることは出来ません。キリスト教は“(ナザレの)イエスの宗教”ではなくて、“(復活者である)イエス・キリストについての宗教”なのです。

2. ヨハ

この福音書のテキストは、復活のキリストが弟子たちに現れてくださったときのことを物語っているのですが、その構成がミサにおける聖体拝領の場面を再現していることに注目したいと思います。

v.13 「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。」

新約聖書を生み出した初代教会では、使徒たちや使徒たちが任命した長老たちによって各地の教会でのミサが司式されていました。新約聖書に登場する長老とは、後の教会の司祭に相当します。ミサを司式する司祭がキリストの代理者であり、復活のキリストはこの司式者の姿で会衆と出会ってくださることを、こ

の物語りは教えているのです。それは最初に使徒たち自身が体験したことでした。

v.12 「イエスは、“さあ、来て、朝の食事をしなさい”と言われた。弟子たちはだれも、“あなたはどなたですか”と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。」

使徒たちに現れて“神の福音”(ロマ 1:1)を理解させてくださった同じ復活のキリストが、ミサをささげる私たちにもその同じ福音を理解させてくださると、この物語りは教えてくれています。ただそこには、使徒たちの宣教の起源についての特別な神の御手がありました。すべてのキリスト者たちが、長年の信仰生活と学びの積み重ねによってやっとその幾分かを理解する“神の子イエス・キリストの福音”(マコ 1:1)を、使徒と呼ばれる最初の弟子たちは主の復活後の数週間で深く理解し、その証人また宣教者となったのは、このとき限りの特別な聖霊の働きによることであつたと認めざるを得ないのです。

3. 黙

ヨハネが幻に見た天上の礼拝には、屠られた小羊であるキリストが、玉座に座っておられる父なる神と共に賛美されていて、その周りに長老たちがいました。この長老たちとは各地の教会の司祭たちのことです。地上の教会のミサが天上の礼拝の写しであり、最後の完成の先取りであることを、この幻の中でヨハネは知ったのでした。

各地の教会でミサを司式している司祭たちは、地上ではこの復活のキリストの代理者であり、その手によって会衆である私たちが小羊の食卓に与かって永遠のいのちの糧を拝領するのです。その司祭たちも、私たち会衆も、最後の完成の日には共に天上の礼拝の群の中に加えられることでしょう。

アーメン、ハレルヤ。